

私は惨めな人間だと思う。恥ずかしすぎて人に絶対話せないこともあるし、あまり頑張れない性格だし、友達も少ない。彼氏作れないし日本にきても日本語がよくなる。定職を持つとは思えないので将来もかなり暗いかもしれない。大学の専攻も三年生になってもはっきり決められない（ダンスかなんかにしようとか思っていたけれどそれはたぶん無理になっている）。さらにいろいろ納得しづらい性格で損していると思う。ものごとの有り様でとにかくいろいろ認められなくてかなり損しているかもしれない。幼い頃体罰受けていたことから人が触れられないものが欲しくてサーカスをやり始めた。学校から帰って何時間か鏡の前でストレッチしていた。18歳の時仕事にもしてみた。クラブとかイベントとかで演奏するエジントに入ったけど、自分がずっとイメージしていたサーカス（昔風の移動してキラキラの衣装を着て技を極めていくやつ）とはかなり違った。勝手にイメージしていたサーカスが実際ナイトライフに組み込まれていることがわかった。社会のアウトサイダーの寄せ集めだったはずが実際その反対になっている。その上司も元々新体操選手、サーカスパフォーマーでとても才能を持っている人なのだけど、自分のイメージしている「成功」をととても押し付けてきているような感じだった。有名人とかかわったりとかお金を稼いだりとか。皆で10人位だけど他の子も体操チャンピオンやらモデルやらプロダンサーやら私よりずっと才能の持っている人ばかりだった。一時期サーカスやりにサンフランシスコに行った。数ヶ月行ったところアパートの賃貸契約が切れて、一緒に住んでいた友達がメキシコに行って、私が一人の友達のお母さんとその奥さんのところで居候させてもらうことになった。そのお母さんがレズでありながら牧師で、二人とも愛情に溢れる性格でお笑いキャラ。毎朝そこで起きてすぐその大きくて花と果物が生えている裏庭に出て、木から朝ご飯を摘み取ってそこにいた鳥たちに挨拶しに訪ねた。いつかこんな生活したいなと思いつつ、確かに当時の自分が頭おかしくなりかけていたのを覚えている。ニューヨークに帰るか迷っていた。コーチがお金の問題なら家賃でもなんとかしてくれるまで言ってくれて、ゲイバーでキラキラのティーバックしか着てないゴーゴードダンスしているサーカスの仲間が「ニューヨークに戻るなよ、数学の先生とかになっちゃうよ」と言ったのが未だ耳に響いている。現在サーカス曲芸者として食べていくにはイベントにでる形になるけど、私はそのストレスに耐えられなくてやめた。そもそも自分がサーカスを好きになった理由と全く違う方にのめり込みそうになっていた。そこまで頑張れなかったというのもあったし。だからやめて、取りあえずやりたいことはなかった。趣味も将来の夢も同時になくなって、さらに何年間も頑張っていたことを失敗したような感じでそのことを人に話さなくて当時の彼氏のところに閉じこもって落ち込んだ。未だにそういう気持ちは少し残っていて将来の計画もそこまでやりたいこともない。関心持っているものがあって、できたら将来に活かしたいとは思っているけどそれはサーカスに入るといふことよりも現実的ではない。高橋さ

んを対話相手として選んだのもここにあると思う。どうやって高橋さんが現実的じゃないことを実現させたかすごく気になった。8年間も旅しているというのは、まず自由そうで憧れる生き方だった。だけどそれはたぶん私の勝手な妄想を彼の生き方に押し付けて、当てはめようとしているだけかもしれない。話してわかったのは私が個人的に興味を持っているものと、なぜ高橋さんと話したかったのかというとの繋がり。つまり普段ありえないと思うようなものを実現するにはどうするか。「実際できる」と単に聞きたかったかもしれないし。高橋さんも現実的でないものを現実にしたんだな、と彼の話聞いて思った。私は将来性がないかもしれないけど今のところ2つのやりたいことがある。高橋さんと彼の経験も私の関心についても話してみた。

自分でAV監督としてAVを制作したい。AVというのは、インターネットの普及にもよって美術よりも近づきやすい。おそらく高校生は教科書よりもAVの方を見ているし、教科書よりもAVに教育されている。だれでも簡単に見られるし、どんどん幅広く出てくるし、お金を払わなくて見られることで、社会でめったにない無差別なメディアとも言えよう。つまりお金持ちであっても貧乏であっても国籍人種問わず同じものが見られるし、手近にある。だから影響力もすごいと思う。メディアというのは、何が普通か普通じゃないかを提示することで「普通」という概念自体を具体化し強化して、ある意味人の行動を規制する道具としても働く。メディア自体が殆ど政府に規制されていると思えばさらにそうだと思う。AVもまさにそうであろう。AVによって、ある意味セックス自体が画一化されていて変に限られている。ほとんどノンケの男しか作っていない事実を考えればこれは当たり前なことだと思う。この前同い年の男に「女ってセックスでいけるの？」って聞かれて非常に悲しくなった。でも実際女も見ているのでいろんな人がいろんな視点から作ったほうがいいと思う。出まわっているものは主に同じような人が作っているものなので、同じようなものになっているというところで、セックスが画一化されていると思う。もちろんフェチのやつもあるけどフェチというカテゴリ自体がこのことを強調する。人間の本当に自由に持っているはずのものは体だけだとすると、なんでその動きまで限られているのを認めているのかおかしいような気がする。なんである種のセックスのありかたは恥ずかしく思わなきゃいけないのか。人を傷つけないければ皆やりたいように恥ずかしく思わずにやればよいと考えたい。一人一人違うし体も違うから「ああセックスってこんなものなのかと」思って同じようにやっているのはおかしい。だからもし自分で作れば、その幅を少しでも広げたい。あと女性向けのやつも作りたい。AVはなくなるわけないしあってもいいと思うのでいずれそうなると思う。という風に、最近AV監督に話した。彼も昔「もうちょっと女性向けのやつを作ればいいんじゃない？」と欲していたらしいけど、結局商売だし売れないという面から見れば無理だという。ここで私のやりたいことは現実的じゃないかもしれない。いきなり女性向けのやつとか売れないだろう。だから出す側はかなりその面で損するかもしれない。現在女性向けのやつは殆どお店で置いていない文化だからいきなり受け

いられるはずはない。だけど作らないと事情が変わらないのも確かだと思う。女性向けだけではなく女性を考えたやつにも興味を持っている。殆どのAVが男が射精したところで終わるのでその同い年の知人のように女のことをよく知らない男も女もたくさんいると思う。セックスは暴力、支配の表れとして世界中で使われているケースが多いと考えればセックスもAVもなくなりたいしなくなればいいというわけではないので女、いろんな人がいろんな視点から作ったものを出す必要性が本当にあると思う。史上セックスはレイプなどで支配の手段として使われてきた。セックスはノンケの男のものとして成り立っている(AVなどを通して)ことは考え直した方がいいと思う。最後に自分のAVを作れるとして普通の人を出して、出てくれる人をよく扱いたい。アマチュアビデオモデルがたまに十分教えられていないまま出るのが危ないと思うし、もうちょっと支配の主導権を握ればいいのではと思う。

大人用の遊び場、遊具を作りたい。滑り台やぶらんこなどが設置してある遊び場はよくあると思うけど、あまり大人だけで入れるところじゃない。子供にとって砂場で他の子供と遊ぶことは、自分と違う人と仲良くしたり、自分のおもちゃを他の子供にも一緒に使わせたりできるようになるための教育にもなるとアメリカで言われる。だけど結局大人になったらこういう美德を捨ててもいいことに気付く。自分の所有物を他の人に使わせなくてもいいし、自分と違う人間ともかかわったり仲良くする必要もべつにない。これは大人の遊びというのは美術館にしろクラブにしろお金がかかることばかりのためでもあるだろう。遊び場みたいに誰でもお金を払わないで遊びに寄っていける場所はあまりないような気がする。マンハッタンの方の北の方のハドソン川の側に公園があって、その中に大きな砂場で、長く並んでいる吊り輪みたいな遊具が設置してあるところをある日迷い込んだときに見つけた。この吊り輪はかなり高いし動かせるので10人ぐらいがそこに集まって技を極めていく。私も入って一回やってはまった。そこに3時間ぐらいいて私みたいに迷い込んだ人も、前から知っている人も行き来して、日が暮れてくると人が持ってきているフラフープや玉や綱渡りがでてきたり、アクロバットとかをしたりして皆で遊び合うのである。そこにいた人達はお父さん、子供、お金持ちの彫刻家、ホームレス、ウェイクボーダー、マッサージ師、モデル、やんちゃな高校生、選手、いろいろ。私もそこによく通うことになった。いついっても知っている人でも知らない人でも誰かしら吊り輪で技を挑戦しているし、知らない人でも話しかけやすい空気だった。ホームレスの男がお金持ちの子供にやり方を教えて指導したり、私もその一人とデートするようになり、いろんな人の間で潤滑剤としても働く吊り輪で遊んだりとても気持ちよかった。砂場であるため川を眺めたらまるでビーチみたいな感じの中、皆で体もおもちゃも使って遊んでいた。もっとこういうところがあったらいいなと思った。そういうこともあって、単に遊具も遊び場も好きという理由もある。子供のやつはあって嬉しいけど私が作るなら大人でも楽しめるようその吊り輪みたいにデザインをよく遊具もでかくスリルを高めて皆で遊んでもらいたい。

## 高橋さんとの対話

高橋さんと私は、あるテーマについて話をしたのではない。私は逆に高橋さんとの対話を通してテーマを考え始めた。自分として一番気になることは、録音のなかでもっとも多く出ていたので、それを今までの内容として書いた。その対話から一番自分としてよかった点を拾って、下記の通りにした。今改めてまとまった「よかった点」を書き取りながら、なぜよかったと思うか、などについて考えていき、ようようテーマに至りたいと思う。

1. T: その法律的にどうのというのも自分にとってプラスなのかただその何がプラスなのかというのはいつも自分が考えていかないと流されちゃうので。たとえばここまでするのはプラスだけど時間ももっと長くなったりしたらマイナス。やっぱりそれは自分で決めていかないと。

これはなんとなく私の心に響いた。AV を作るとした場合の法律に巻き込まれる可能性について話をしている高橋さんがこう言った。対話以来無意識的にこのことを思い出して、いろいろと決定していたような気がする。

2. C: また旅に持っていくんだけど多分サーカスみたいに高橋さんの話に自分のイメージ押し付けてるかもしれない。

T: たぶんそれはあると思うよ。一人一人違うわけだしマニュアルとかないから自分でしてみると全然違う体験していくことになると思うからね。

C: その日常生活やめて旅行こうと思ったきっかけって?

T: 自分でもいろいろ考えてみたけど本当に小さなタイミングってのもあったけどなんか毎日が退屈で友達のちょっとしたエピソードを聞いてああ行っちゃえみたいな。でそれで一ヶ月でかけて。

C: 学校やめて?

T: その時はやめてなかったんだけど旅がおもしろくて途中でやめちゃって。

C: でもそののりで最初行っても8年間も行って見て、実は現実的な生活よりも大変だったりしたの?

T: なにが一番ハードなんだろう、たぶんポジションがない、自分のシチュエーションをポジションで説明することができないわけで、本当に誰だ? と聞かれても裸の自分でしかないからある意味社会の中で一番弱い人。で帰ってきたら何してるんだお前はみたいなことたくさんの人に言われたし。

C: 何してるんだ俺と思わなかった?

T: やっぱりそれは思ったことあるけれどもそれはハードな面の一つで自分が今なにしてるのかって自分で答えを作っていけないと。それは一番普通の生活と違うというか自分にいつも問いつづけないと。他の人にどう思われてもいいけど自分に問い続けないとそれこそ俺なにしてるんだで終わっちゃう。結局社会のメンバーじゃないわけでそこからみてオブザーヴァーなんだね。一生懸命いろんな人と付き合っていくけれども最終的にはオブザーヴァーなんだ。

私にもたようなことを聞かれたことがある気がするし、実際大人用遊具を作りたいですと人に言ったら同じようなことを聞かれそうである。しかし、「どう思われたっていいじゃん！」と人の言うことをぶっ飛ばすばかりではなく、聞かれるようなことをしているからこそ自分自身に問い続けることが大事なかもしれない。そうじゃないと自分も狂いそうだし流されそうである。私は高橋さんの経験を自由だなどと理想化していたけど、実際裸の自分に向き合い問い続けることこそがむずかしく、また大変なことなのかもしれない。前のテーマ、「人間っぽく生きる」を思い出す。

### 3. C:女でもそうやって一人旅とかできると思う？

T:女だからってというよりもココさんと僕は違う人間だから同じことはできないと思うけど、でも女性のそういう人たちは結構たくさん旅行にきてて女性一人でイスラムの国とか危ない国があってそういう時は一緒に行くパートナーを見つけて一緒に行ったりする。

C:でも例えばヒッチハイクとかさ。

T:は危ないかもね、ある場所で。

T:でもその先話した彼女が一人でインドに行って、でインドでレイプされちゃってで結局頭がちよっとおかしくなってアムステルダムに戻ってきた。そういうことはある。

C:でも私そこまでして旅行したくないんだよね。

T:それは自由だね。でも思ってるより旅行者は多いし

高橋さんはすごいことをしたけど、私にもできるのか？誰でも自然にできちゃうこつなどというものがあるのか？この話を読んで思ったのは、いやなことを避けるこつというのはないということである。すごいことだからこそ、すごくいやなこともあるだろう。いやなことがあるからこそ普通の人はやらない、またはやれない。上で言っているような、レイプされる可能性がかなり高くなるようなことは、私はそこまでやりたくない。もちろんこの女性も事前にそうなるを知っていたら行かなかったかもしれない。ただ私が思ったのは、こういうすごいことをやれる秘訣などはないということである。いろいろあるかもしれないと認めた上で、人が行くのだろう。

4. C:でもジョンミさんが今日言ったことと似てると思うんだけど私高橋さんほど心広くないんだよね。いろいろ納得しづらい性格なの。で損してると思う。だけどだからといっていやなことは認めたほうがいいとも思わないけどね。

T:それは何かということによるよね。だから自分は絶対譲れないものというのはきっと誰でも持っていて。だからその絶対譲れないものは譲らないけどその譲っちゃってもいいやというものを譲ってしまっ。大変だったらオッケかなという範囲だったら譲ってしまっ。

C:でもこれは絶対おかしいということが結構いろいろあって

T：なんでおかしいのかは考えていったほうがいいかな。考えていくとこれは絶対譲れないとか手を離してもいいや楽になりたいとか

C：そう言われてみれば気が利きすぎというかなるほどねと思うんだけどさ。

T：うんたぶんそのへん。。俺はだめだろうっていくら思っているけどああそっかそれはそれでいいんだなってかわっていくことがあって

C：年とっていくと？

T：というかいろんなものを見てきたからいろんなものがありだなという考えがある。だけどココさんが言ったことだけど普通にしてる日本の人よりは譲れないことが多い。なんでこの人達こんなもん譲っちゃってるんだらうと思うことはたくさんあるし、反対になんでこの人こんなこと譲らないんだらうと思うこともたくさんある。だから自分で価値観を作っていくしかないんじゃない。

C：私の勝手な解釈では認めたほうが狂わない。

T：そうなんだけど、表面的に。本当に狂うまでいかなかったってのもある。

この会話はかなりよかったかもしれないけれど、よく録音されていなかったのによくわからない。ポイントは「価値観を作っていく」というところのような気がする。

5. C:日本に住んでて大変なのはいつも嘘ばかりつかないやいけいけい。挨拶もそうなんだけど。

T：なるべく嘘つかなくていい状況を作っていくしかない。

C：自分のこととかについて最初は普通に話しちゃったんだけど変なリアクションされてなんだこいつとかかなり思われてたみたいでやっぱり隠した方がいいかと。

T：思われたっていいじゃん。

C：うん、でもやっぱり仲間がほしいじゃん。

T：思わない人だっていっぱいいるはずだよ。でそういう人と本当に繋がってほしいんでそうじゃない人とはニコニコ嘘ついてればいい。

C：なんか最近気付いたんだけど自分が心広い人間だという風に思い込んできたのね。だけどそれはニューヨークとかでだいたい同じような人間にしか囲まれてないの。だからニューヨークはなんでもありみたいな考え方の風潮があるの。だけど一つだけ絶対ないってのがあって、それはなんでもありと思っていない人の考え方、例えば同性愛は不自然だから絶対ないという考え方。そういう考えとか私も絶対受け入れられない。だけどそういう私も結局そういう人とあまり変わらないかもしれない。たぶん若いからなのかね。ジョンミさんが言ってたように正しいと思ってる事は絶対譲りたくない。

T：でもさ、同性愛が許せないという人の一つのイメージあるんじゃない？でも例えばここに一人許せないという人がいて、でもすごく素敵な人なの。そういう関係はできてきた時にどうするか？

C：やっぱり受け付けない。

T：うん、だけどそれは現実的に考えて、そこは絶対許せないけどその人と繋がっていききたいという気持ちはできたとした時に、この人とつながっていきけるかなって考えたくなるかな。繋がっていききたいと思えばなんでこういう考え方を持ってるんだろうと考えてで話し合ってたわかったりわかったらなかったり。つまり今決める必要はない。もっとすごく具体的な人間として考えて、でその人も実際変わる可能性持ってるし。

一番耳に残っているのは、「今決める必要はない」ということである。私は「例えば日本人を卑下している人だったら？」などと高橋さんに念を押したけれど、高橋さんは「うん、でも今この場で決める必要はないでしょ。」という風に答えた。その時はよくわからなかったけれど、テープをもう一回聞いてみて私はこれが気に入った。どんなにあつい事でも、「それは絶対認めない」とわざわざ前から決めなくてもいいかもしれないと思った。よけいな作業だし。

ここまで読んでみて、「認める」と「現実」という言葉がよく出てきていることに気付いた。私の過去も、未来についても少し話したが、この言葉が何回か出てくる。過去にちょっと理想化したサーカスをずっと目指していたのかもしれない。現実的じゃないサーカスを目指して、現実には直面するような時がきたら認めずにやめた。今の日本に住んでいる現実についてもいろいろ認めにくいことがある。高橋さんの話が気になって、私もやりたいと思ったが、彼の話をよく聞いて私には無理かもしれないと思った。将来に関してはかなり現実的じゃないような夢を持っている。わたしには作りたい AV があるけど、制作するのにお金がかかるのに儲からないという現実的な話を以前聞いた。ここまで読んでこういう現実的じゃない夢を見るのは、おそらく自分のためにならないのでは？と自分でも思ってしまう。だけど結果的にどうであれ現実的じゃないサーカスを目指していたのも高橋さんの経験を想像しながら聞くのも気持ちよかった。それでいろいろ面白いことが知れたし。こう考えたらこのエッセイを綺麗にまとめられない。だけど対話で一番聞いてよかったなと思った、「今決める必要はない」という言葉があった。物事を認めるか認めないかについて。高橋さんの旅の話はすごい。普通聞いて現実的ではないと思う。だけど現実的じゃないことほど認めにくいことがあるようなきもする。認めるかどうかは今決める必要はない。こういうことは一番聞いてよかったかもしれない。今私は認めないことがあることを認めた上で、いつまでもそういうことを認めないでいることがづくというこもないということも認める。これは価値観を作っていくということかもしれない。だから例えば遊び場を作ろうとして認めにくいことがあっても、そのことをその時に考える余裕ぐらいは持ちたい。決めるのはそんな簡単だと思わないけど、「なんだ私認めるか認めないかをそんなに大げさなことにしちゃって」とはちょっと思う。私の価値観は完成しているものではないと認めて、それを現実できじゃないことほど考えていくように決心したい。

終わりに：

この授業の一番面白かったところは、レポートを読んで、皆さんのことをよりよく知ることができたことだった。皆さん面白いからとても読みやすかった。普通に生活していて知り合う人全員にこのようなレポートを書かせてみたいと思った。このレポートを通して、自分が変わったことなどは別に思い浮かばないが、頭で思っているけれどなかなか日本語で説明しにくい事を少し言葉に出せたような気がしてよかった。